平成の開府元年
まちづくり構想

～　また八雲が歩きはじめるまち　～

平成 25 年 3 月

松江市

はじめに

宍道湖、堀川をはじめとする風光明媚な自然に恵まれ、小泉八雲の「知られぬ日本の面影」で世界に紹介された本市は、国際文化観光都市としてまちの魅力を高めてまいりました。

また、２０１１年まで５年間にわたり開催した「松江開府４００年祭」は、「まちづくり」「ひとづくり」をテーマに市民の皆さんと一緒に様々な取り組みを行ってまいりました。

そして、国際文化観光都市６０周年を迎えた今日、これまでの先人たちのまちづくりに敬意を表しながら、さらに魅力の高いまちを目指し、また松江開府４００年祭の成果を次代につなげていく必要があると考えています。

一方、私たちを取り巻く情勢は、依然として厳しいと言わざるをえません。人口減少、少子高齢化、経済のグローバル化、東日本大震災の発生など、東京一極集中と地方の疲弊、人と人との絆やコミュニティの大切さなど、改めて考える時期にきています。

さらに、平成の大合併と東出雲町との合併により、将来にわたる市域が確定するとともに、宍道湖・中海圏域は、５つの市で結ばれました。特例市に移行した本市は、山陰最大の２０万都市としての自覚を持ち、また６０万人都市圏域のポテンシャルを活かしながらまちづくりを進めていく必要があります。

このように時代の大きな転換点や節目を迎えた機をとらえ、新たなまちづくりに踏み出すために、２０年後の将来を見据えた「平成の開府元年まちづくり構想」を策定いたしました。

さて、本構想は、「また八雲が歩きはじめるまち」をコンセプトにしています。１２０年前に来松した小泉八雲は、当時、誰もあたりまえに思い、気づかない松江の良さを見つけ海外に紹介しました。私たちは、今一度、八雲の視点に立ち返り、松江の良さや松江らしさを再発見し、それを誇りに感じながら、新たな価値を生みだしていく必要があると思っています。

そして、本構想により、将来の「夢」や「目標」が市民の皆さんと共有され、まちづくりを進める強い意志と行動につながり、世界にふたつとないまちがつくりあげられることを願っています。

終わりになりますが、国内外の情勢を大局的に捉えながらご意見いただいたビジョン懇話会の委員の皆様、市民懇話会、地域座談会、シンポジウムなど様々な形で構想の策定に参画していただいた多くの市民の皆さんに心から感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月

松江市長　　松　浦　正　敬

目　　次

まちづくり構想のコンセプト 1

構想のコンセプト 1

目指すまち 3

構想の発想 4

構想実現に向けた手法 5

構想の構成 6

松江の挑戦目標 7

１．松江に新たな産業を興していく 9

２．松江が「人」を育てる、「人」が松江で輝く 29

３．松江の魅力を高める「都市デザイン」 39

構想策定の経緯 49

構想に寄せて 53

構想のコンセプト

八雲が松江で何に感動し、
日本に何を思い、世界に伝えたのか
～　「八雲が見ていたもうひとつの松江」　～

八雲は、「日本の国が失いかけているゆったりとした落ち着き、日本人ならではの佇まい、それでいて新しいものを受け止めていく姿勢」を松江に見たのではないでしょうか。

振り返ってみると、不昧公は雲州人参などの新しい産業を興し、独自の茶の湯世界と文化をつくりあげました。

神話の世界は、銅器や鉄器、医療技術など、まさに新しい技術を活用した国造りの物語です。

明治の初年、松江藩は、横浜に松江藩ビール工場を持ち、ビールを醸造し、そこにアンテナショップをつくって藩の物産を売る、そういう新しい感覚を持っていました。

八雲が暮らした明治 20 年代も、松江ではビールを手に入れることができ、八雲はそれを好みました。また牛乳の先進地であったことが八雲の健康を救っています。

松江は、新たな挑戦を繰り返してきた歴史を持ちながら、同時に、八雲が「古い絵巻物」と記した古くからの日本らしい景観と文化を持つまちなのです。

質素な木造の家に住み、日の出や月の出に手を合わせる素朴な心を持っていた、そんな古いものを守りながら最新のものも受け入れ、発信していく、そんな松江を八雲は愛したのです。

これが松江らしさです。

●では、松江市民の価値観はどうでしょうか。

象徴的なものが、お茶文化の楽しみ方です。

「この町では、お茶は、けいこ事でもなければ、見せかけの教養でもない。よその町で、番茶を飲むように、さらさらと薄茶をたてて、飲む。コーヒーを飲むように、ジュースを飲むように、飲めば良い。

お茶とは、本来そういうものだと、この町の暮らしが教えてくれるのである。

和菓子も、いい菓子が多いが、それでいて、どれひとつ、いやに気取った高いものがないのが、いかにもこの町らしく、これは誇ってもいいのである。」

（暮らしの手帖　花森安治編集長の評）

このように、誇れる文化を新しくつくり育てるセンスを持ちながらも、その本質を見極め、決して気取らず市民の暮らしの中にこの文化を溶け込ませています。

これが、松江の「暮らしぶり」＝ライフスタイルです。

●ビジョン懇話会や

シンポジウム・市民懇話会等での議論

- ●良いものをまずは活かしきること
- ●松江のような 20 万人都市は、まちづくりを進める最適なサイズ、中海・宍道湖・大山圏域 60 万人都市圏は、連携するのに最適なサイズ
- ●文化の発展は経済の発展を前提とするし、促進もする
- ●松江駅から塩見縄手までのまちのデザインをもっと考えたい
- ●松江は安住し過ぎているところもある。危機感を持った取り組みを進める時
- ●最終的には人づくりだ。長期的な構想にこそ人づくり計画を含めたい

その他多数の意見を受けて本構想をまとめました。

参考文献
『松江特集』　高橋一清 編
(社)松江観光協会 発行

目指すまち

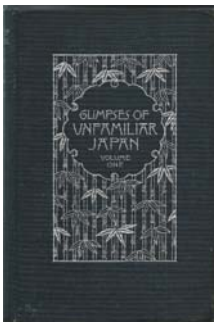
～　また八雲が歩きはじめるまち　～

―まちづくり構想で新たにチャレンジするポイント―

- ●世界市場で注目を集める松江発の新製品
- ●新しい息吹が吹き込まれる「松江の伝統と文化」
- ●国内外の人を惹きつける松江スタイルの旅
- ●まちなみの統一感に古くからの自然景観が溶け込んだ都市
- ●挑戦を繰り返し新たなものを生み出す人々とまち　　など

約 120 年前、八雲は松江に残る古い景観や名所や歴史・文化やそこで暮らす松江の人々の息遣いを「日本の面影」として伝えました。この「知られぬ日本の面影」は、世界最高の旅行ガイドブックと海外から評されています。

20 年後の未来には、磨きのかかった松江らしい佇まいや、人々の生活（ライフスタイル）に根づきながら進化し活気を生み出す新たな産業、伝統・文化の共生など、新しい松江の姿がそこにあります。



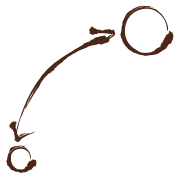
「知られぬ日本の面影」
写真：小泉家

その松江に降り立つ八雲は、まちの雰囲気に何かを感じ、再び松江のまちを歩き出し、各地を巡ります。そして、20 年後の未来に記す「神々の国の首都」では、古き良き日本に新しさが見事に調和した他には真似のできない松江のまちの良さと人々のライフスタイルを、八雲は新しい驚きを持って描き、世界に紹介することでしょう。

かつて世界的陶芸家バーナード・リーチなど多くの文化人が八雲の著書を読んで松江を訪れ歩き出したように、20 年後、国内外から訪れ、訪れたいと思え、訪れた世界の人々が誇りに思い、訪れたい人々は憧れに思う、そういうまちがつくりあげられることでしょう。

構想の発想

～　逆転の発想　～



良いものは十分あるが、それが活かしきれていない。そのため、新たな活気が生まれず停滞感にもつながっているという、今の松江についての指摘があります。

この構想で最も必要だと考えているのが、松江が持っているものを十二分に活かすための「逆転の発想」です。

●従来型の大規模資本の企業誘致を柱とする産業発展ではない。

●世界の大規模市場ではなく、小規模だがなくてはならない製品を供給するすき間市場（ニッチ市場）で勝負する。

●厳しい状況にある伝統産業･農林水産業の復活の鍵は、大量生産型ではない、製品価値が高まる少量供給型（小ロット）でストーリー性のあるもの。

●高齢化先進地の状況を逆にまちの活力とする。

などです。

これまで固定化されてきた考え方や発想を「逆転（転換）」させ、逆境と思われていたものは前向きに捉え、成長につなげていくのです。

ただ、ひたすら数を追い求めるだけの経済成長でもなく、東京や他の先進都市と言われるまちを目指すのでもありません。

「本物指向」に応えられるまちです。松江にあるものを見つめ直す発想の転換で、新たな価値を生み出していけば、それが、まち全体の好循環と持続力につながっていき、「松江は松江らしく」未来を切り開き発展していくことができるはずです。

そして、「世界にふたつとないまち」ができあがり、自然と国内外から注目が集まり、人々が集ってくることでしょう。

構想実現に向けた手法

～　協働から 共に創る 共創のまちづくりへ　～

今まで、市民の皆さんと「協働のまちづくり」として、まちづくりを行ってきました。

これからは協働はもとより、構想実現のために、共に創る「共創」のまちづくりを進めていきます。

いろいろな分野の市民のつながりや組み合わせで、新しいものを生み出していきます。

「協働から共に創る共創のまちづくり」

そのためにも「人」を松江が創り、「人」が松江を輝かせます。

あらゆる人にチャンスがあり、挑戦を繰り返すことができるまちをつくります。

それがまちづくりのエンジン（原動力）です。

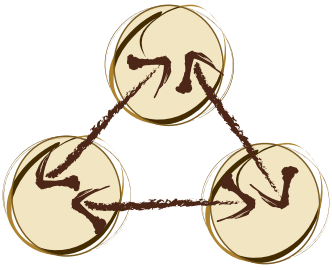
「共創」という姿勢は市民に限ったものではありません。

中海・宍道湖・大山圏域を共につくりあげ、国内外都市の人々との多彩な交流を深めていきます。それはおのずと、松江のまちや人にさらなる活気をもたらすことにもつながるでしょう。

この構想は、このような考え方でまとめています。

構想の構成

三本の柱そして三本の矢



松江に新たな産業を興していく

松江が「人」を育てる、「人」が松江で輝く

松江の魅力を高める「都市デザイン」

未来に向け今から始まる新たな挑戦

松江の挑戦目標

１．松江に新たな産業を興していく

1-1 観光産業のバージョンアップ　～世界を魅了する松江スタイルの旅～

１．観光消費の域内循環を促進する　～地域全体のおもてなしで観光消費拡大へ～

２．松江のインバウンド（海外からの観光客誘客）を増強する

1-2 次世代型ものづくり産業の創出　～世界で勝負できる企業を生み出す～

１．「隠れたチャンピオン企業」が生み出す松江発の新製品

２．中海・宍道湖・大山圏域内企業との「相互補完・共創」により、新しい価値をつくる

３．産業融合によるものづくり産業の「サービス化」

1-3「Ｒｕｂｙ」が世界を変える　～松江にしかできない情報産業をつくる～

１．Ｒｕｂｙを核にしたＩＴ産業の世界的集積をつくる

２．Ｒｕｂｙを活用してさまざまな産業課題を解決する

３．Ｒｕｂｙによる子どもたちへのプログラミング教育

1-4 伝統文化が生活文化産業として発展する

１．松江「和菓子」･「日本酒」を世界の舞台へ

２．不昧公茶の湯スタジオ

３．現代版「松江美術工芸研究所」

1-5 農林水産資源のさまざまな価値を活用したビジネスの促進

１．本物の食ブランドで「もうかる農業」をつくる

２．宍道湖・中海・日本海の水資源のさまざまな活用

３．松江「産直フレッシュマーケット」の開設

1-6「産官学民」の「チーム松江」が新たな産業・仕事をつくる

１．日本で最も「創業・起業に挑戦しやすい地域」になる

２．連携をリードする高等教育機関（島根大学・島根県立大学・松江高専）

３．ビジネスを支える専門人材の充実、ネットワーク化

２．松江が「人」を育てる、「人」が松江で輝く

2-1 次代の人材を生み出し続ける

１．松江からグローバル人材を輩出する

２．子ども・若者の「学び直し」をサポートする地域コミュニティ

３．次代の専門人材を輩出する新たな島根大学・島根県立大学・松江高専

４．連携をリードする高等教育機関（島根大学・島根県立大学・松江高専）（再掲）

2-2 女性・若者など多彩な人材が松江に新たな価値をつくる

１．女性・若手リーダーの創出　～女性と若者の感性で地域を変える～

２．女性・若手クリエイターによる松江のリデザイン

３．若手アーティストと伝統産業とのコラボレーション

４．海外からの留学生など外国の人々が活躍できる舞台づくり

2-3 アクティブシニアが躍動するまち

１．シニアベンチャーの促進～高齢者の知恵で仕事をつくり出す

２．アクティブシニアのライフスタイルが創造する新たな松江

３．健康寿命を伸ばすプログラム

３．松江の魅力を高める「都市デザイン」

3-1 景観・まちなみのトータルマネジメント

１．松江駅から塩見縄手、松江城までのトータルデザイン

２．松江らしい駅前と水辺空間をつくる

３．松江駅から松江大橋までの２本の大きなまちあるきルート

3-2 中心市街地の再活性化と連携

１．中心市街地の「日常的賑わい」を再生する

２．産官学連携のまちづくり会社の設置・運営

３．歩きたく、つながるまち

3-3 世界とのつながりの中で輝く松江づくり

１．世界とのダイレクトなネットワークづくり

２．「松江の文化力」で世界に広がる人のネットワーク

１．松江に新たな産業を興していく

松江市は、豊かな歴史・文化と自然環境に囲まれた国際文化観光都市として、山陰地方の発展の一翼を担ってきました。

誇れる良いものがたくさんあり、非常に恵まれた地域だと市民や有識者も感じていますが、現状では将来への不安を感じざるを得ないといった認識も広がっています。人口減少問題はもとより、特に仕事・雇用を心配する市民が多いことは深刻に受け止めなければなりません。

せっかく豊富にある地域の資源が十分に活用されていないことが原因だという指摘があります。

自分たちでは当たり前だと思っていることも含めて、松江の良さを再認識し、それをさまざまな形で活用し、松江に新たな産業を興していく挑戦を始めます。

企業をとりまく国際環境の変化は激しく、大規模資本の企業・工場の進出が、経済的な活況を長期的にもたらしていく保証はありません。

松江市がこれから持続的な発展を遂げていくために、この地に引き継がれてきた文化や技術・技をさらに磨いていく取り組みが最も重要です。

人口減少が予想される地域で、いかに消費を拡大し、産業や雇用を維持していくかという状況下で期待されるのが「観光産業」です。

20 年後も松江の主力産業となる「観光」は、近年、団体旅行から個人旅行へ、観光から旅へと人々の指向は時代とともに大きく変化しています。その中で主流になりつつある「まちあるき」では、そのまちの人々が誇りに思う歴史・伝統文化・日常的な景観、その「暮らしぶり」を買い物や飲食をしながら楽しんでいます。

松江には、これからの国内外の旅行者が求める魅力が十分にあります。これから選ばれていく可能性が非常に高い地域として、旅行者のニーズを的確に捉え、さらに磨きをかけ、国内外からの交流人口の拡大と観光消費の拡大で、雇用や大きな経済波及を生み出す真の観光産業へと発展させていきます。

ものづくり産業や Ruby など IT 産業でもすでにさまざまな挑戦が始まっていますが、松江をはじめとして中海・宍道湖圏域の企業が持つ技術を組み合わせることで、小さくても世界で堂々と活躍する企業を次々と生み出していくことができるはずです。豊かな森に多種多様な木々や植物が生きているように、大木という大企業に過度に頼らない、個性ある地元企業がしなやかで強靭な産業生態系をつくり出します。

先行き不透明な時代であるからこそ、もう一度、松江自身の魅力を「発見」し、その価値を世界に語りかけていくことが大切だと考えます。その地に根ざした生活文化産業は、これから大きな可能性があると言われています。伝統産業・農林水産業でも、「松江らしさ」を活かしながら、新たな成長産業と捉えていきます。

1

観光産業のバージョンアップ
～　世界を魅了する松江スタイルの旅　～

メッセージ

- 松江のまちじゅうに四季折々でさまざまな顔が随所に存在します。
  大山隠岐国立公園に指定される島根半島の景勝地、大根島の牡丹、神話に縁のある神社や歴史的な寺社仏閣、そして四季折々の自然景観や松江のライフスタイルに溶け込んだ伝統文化・食文化が息づいています。

- 旅行スタイルは「団体」から「個人」、そして定番のコースを巡る「観光」から個人個人がそれぞれにテーマを持った「旅」に変化している中、松江には国内外の旅行者がこれから求める資源が十分にあります。魅力ある資源をつなぎ、地域全体のおもてなしで旅行者のニーズにこたえる「松江スタイルの旅」を提案し続けます。

- 国内はもとより、境港と両空港を活かした戦略的な海外からの観光客誘客（インバウンド）で、観光交流人口を拡大します。

- 裾野の広い観光産業の地域での経済循環を高め、雇用の拡大につなげます。20 年後も主力となる真の観光産業をつくりあげます。

■リーディングプロジェクト■

１．観光消費の域内循環を促進する
～　地域全体のおもてなしで観光消費拡大へ　～

時代とともに変わる旅行者のニーズに応え、魅力ある観光資源の間をつなぐランドオペレーターを育成し、松江を深く味わえる体制をつくります。自然に滞在時間、周遊時間が伸びることで、観光消費の拡大を図ります。

また、松江を訪れた旅行者には、松江の魚介類・野菜・米・酒などを存分に味わっていただくことができる体制を整えます。市内の旅館、ホテル等と農林漁業の生産者等がタッグを組んでおもてなしするシステムを確立させ、持続的に発展させていきます。さらには、中海・宍道湖・大山圏域の域内循環を強化していくことを目指します。それぞれの魅力を上手く組み合わせ、連携し合うことで国内外に誇れる強い観光圏をつくります。

旅行者を惹きつけ、何度も松江に足を運んでみたいと思わせる最終的な決め手は「人と人の交流」になります。今後は、「用意されたサービスとしての人的交流ではなく、旅先での何気ない体験」にこそ価値を感じる時代がやってくるはずです。地域全体であたたかく迎え入れる「おもてなし」の在り方を常に検討し、共有し、実践していくことのできる松江をつくりあげていきます。

２．松江のインバウンド（海外からの観光客誘客）を増強する

外国人観光客のニーズをもとに、明確なターゲットを定めたプログラムを検討していきます。フランスなど松江の価値に最も強く共感してくれる国からの誘客を目指したプログラムを官民協働でつくり、現地のキーパーソンなどと連携した戦略的なプロモーションを実施していきます。フランスをはじめとするいくつかの国に対象を絞った戦略を展開することが、結果的にはアジア諸国の富裕層や欧米各国の観光客を呼び込むことになります。

また、海外の大学生等の若者に来訪していただくためのプログラムを、宍道湖・中海・大山圏域の空港や国内外の航空会社、そして海外の大学等と共同開発していきます。松江を経験した海外の若者たちが、将来再び松江を訪れてくれるよう、夢のあるプログラムを目指していきます。

さらには、世界の観光客に向けて、この地を題材とした映画や松江の魅力を編集したショートフィルムを Web に掲げていきます。世界を旅慣れた人々が松江の価値に気付き、日本を訪れた経験を持つ人々が松江の価値を再発見するような仕掛けを提案していきます。

2

次世代型ものづくり産業の創出
～　世界で勝負できる企業を生み出す　～

メッセージ

- ものづくり産業のまちとして発展してきた東出雲町との合併や、中海・宍道湖・大山圏域市長会を中心にした圏域経済の連携強化、さらには尾道松江線の開通など、松江のものづくり産業の新たなステージをつくっていく絶好の機会が訪れようとしています。
  ものづくり産業は、「観光」と並ぶ地域経済の柱となる可能性を十分に有しています。
- 世界で勝負する松江発のものづくり産業を戦略的に創出していきます。
- キーワードは「グローバルニッチ（隠れたチャンピオン企業）」、「相互補完・共創」、「サービス化」です。
- 「グローバルニッチ」とは、たとえ小さくても特定分野では世界水準の位置を占めることを指します。ニッチ市場（「隙間的な市場」）でも、世界規模で見れば一定の市場規模となり、その領域で他にない製品を提供できれば世界でビジネスが展開できます。
- 「相互補完・共創」とは、地域を越えて複数の企業が強みを出し合いながら新たな価値を創造していく姿勢を表しています。中海・宍道湖・大山圏域、さらには県外や海外企業とのしなやかな連携を進めていきます。
- サービス化とは、単にモノを生産するのではなく、社会のさまざまな課題を解決していくものづくり産業を目指すことです。消費者動向や社会ニーズをいち早く捉えて、付加価値の高いものづくり産業で勝負していくことを目指します。

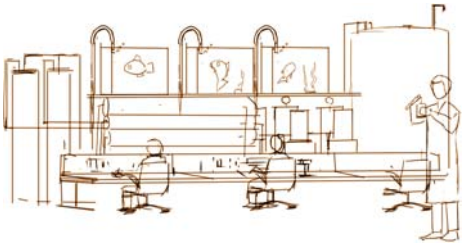
■リーディングプロジェクト■

１．「隠れたチャンピオン企業」が生み出す松江発の新製品

規模は小さくても、その技術やサービス、あるいはデザイン等で世界中の人々から支持されるような企業が松江から次々と生まれることを目指します。例えば現在でも、電子部品に欠かすことのできないディレイライン（信号を遅らせるために使用する部品）の開発・製造で、海外の最先端エレクトロニクスメーカーから高い支持を得ている松江エルメック株式会社は「隠れたチャンピオン企業」と言えます。

こうした動きを加速させるために、産官学連携の研究開発、国内外の大企業との技術提携など、特定領域では世界トップクラスを誇る地元企業を生み出していくための産業支援策を展開していきます。

例えば、松江の自然環境自体を実験台として活用し、グリーンエネルギーの利用や森林・水環境などの環境保全に関連する新製品・新技術の開発を進めます。山・川・湖・海の水資源に恵まれた松江の地理的特性を活かし、水環境保全のための研究開発型ベンチャー（挑戦）を創出していきます。



また、デザインや高付加価値な手工業を強みとするイタリアやスイスなどのビジネスモデルを参考として、松江の歴史文化ならびにライフスタイルを表現した「松江デザイン」を生み出し、さまざまな日用品、調度品、服飾などに展開していきます。デザインに込めた松江の思想、松江の「手の技」が世界から信頼されるブランドをつくっていきます。

２．中海・宍道湖・大山圏域内企業との「相互補完・共創」により、新しい価値をつくる

圏域５市にはそれぞれ特徴をもった企業群が立地しています。松江市には情報サービスや農業機械などものづくり企業、米子市には食品加工関連の企業や電気自動車製造関連の企業、境港市には水産加工業、出雲市には鋳物関連企業や精密機器、安来市の特殊鋼関連など多様な企業集積が見られます。

これらの、圏域の企業および技術を活かすには、「製品や技術レベルの擦り合わせ」をはじめ、圏域としての産業創造戦略を大胆に進めていくことが必要になってきます。

次世代の有力技術の研究開発を圏域全体で推進するためのファンド（基金）の創設、研究開発拠点の設置、トップ水準の研究者・エンジニアの招聘などに圏域が一丸となって取り組みます。圏域の中心に立地する松江市は連携の結節点としての役割を積極的に果たします。

３．産業融合によるものづくり産業の「サービス化」

ものづくり産業が新たなビジネスチャンスを発掘していくため、単にモノをつくっているだけではなく、ものづくり産業が他の産業や分野、すなわち医療、福祉、教育、農林漁業、環境、防災等と密接に連携・融合し合いながら、それぞれが抱える課題の解決に貢献していくことを目指します。

その際、異なる分野をつなぐ接着剤を担うのが松江に集積する情報技術産業です。モノとサービス、そして情報がバランスよく組み合わせられた新たな製品・サービスを提供していきます。

例えば、高齢化先進地域のアドバンテージを活かし、介護関連の技術集積とビジネス展開を促進します。特に介護福祉分野の従事者の負担軽減を図り、サービスの質の向上等を実現するため、介護・福祉現場での介護ロボットの開発を中海・宍道湖・大山圏域の中小企業の技術を結集して進めます。

3

「Ruby」が世界を変える
～　松江にしかできない情報産業をつくる　～

メッセージ

- オープンソース･ソフトウェアのプログラミング言語である「Ruby」は、松江市在住在勤の Matz（マッツ）こと「まつもとゆきひろ」氏が開発したものです。松江市では Ruby を産業振興の基盤資源と位置づけ、さまざまな振興策をさらに加速させます。

- Ruby を IT 産業の要として関連産業の集積を促進させます。要となることはもとより、集積した IT 産業が農業、福祉、観光等の産業にイノベーション（新製品の開発等）を起こしていきます。さらには、Ruby を子どもたちの教育にも活かしていきます。

- すでに世界の共通資産となりつつある Ruby を松江から送り出し続けることを誇りに、Ruby による地域活性化を国内外のパートナーと共に進めていきます。オランダのソフトウェア会社が集計したプログラミング言語の最新の人気ランキングによれば、Ruby は約 200 のプログラミング言語の中で 10 位前後と、人気は上昇しています。この世界的な「資産」をさらに発展させていく拠点を松江が担っていきます。

１．Ruby を核にしたＩＴ産業の世界的集積をつくる

Ruby を活用したソフトウェア開発を行おうとするベンチャー企業を世界中から松江に迎える施策を展開します。市内中心部に「Ruby ストリート」をつくり、ソフトウェア開発、コンテンツ制作、スマホ向けアプリ開発などの IT 産業を集積させます。

そのため、まずは世界のどこよりも「Ruby を活用しやすい環境」を構築していきます。Ruby の生みの親である「まつもとゆきひろ氏」からの各種アドバイス、Ruby を活用する専門家・クリエイター同士の交流による知的刺激の確保、Ruby の活用事例のストック集へのアクセス等々、松江市ならではの Ruby インフラを確立していきます。

また、その前提として、「Ruby ストリート」を手始めに、市内各所の情報通信インフラは、世界トップクラスのレベルを常時維持していくことを目指します。

２．Ruby を活用してさまざまな産業課題を解決する

「Ruby ストリート」は、ものづくり産業、農林水産業、観光産業、福祉産業、教育産業、エネルギー産業などの取り組みを、IT 関連産業が支援していくオープンな場所にします。

そのうえで、皆で知恵を出し合いながら松江発の製品をつくる仕組みをつくり、市民生活や産業が抱える課題を解決する製品を次々に生み出していくことを目指します。

例えば、観光消費の域内循環を促進するため、古事記、出雲国風土記などの神話・物語をコンテンツとしたアドベンチャーゲームを Ruby を活用して制作し、それを楽しみながら松江市内外を観光客が巡り歩くような観光プログラムをつくっていきます。

Ruby は、将来、プログラミング言語の名称としてではなく、「民主的な問題解決ツール」として知れ渡っていくことを目指していきます。

そして、そこから生まれる松江発の製品が日本のみならず海外でも展開し、世界の課題を解決していくことになります。

３．Ruby による子どもたちへのプログラミング教育

松江で生まれ、松江で成長した Ruby を次世代へ引き継いでいきます。

プログラミングの基礎を子どもたちが学ぶことで、世界共通の論理的思考を習得します。プログラミングは現代の「手の技」とも言えます。実現したいことを明確にイメージし、それを実現できるようにプログラミング言語を編んでいく作業は、芸術家の作品づくりに似ています。特に Ruby はプログラミングの楽しさを感じる言語として世界中のプログラマーから強く支持されるなど、わたしたちの創造性を開花させてくれるツールでもあります。

世界中から一流の技術者たちが集う Ruby カンファレンス。それに合わせて、Ruby プログラミングコンテストを開催し、松江の子どもたちと世界の子どもたちが競い、学び合うステージをつくります。松江の子どもたちが世界を意識しながら学べる環境を Ruby の力で構築していきます。

Ruby 開発者 まつもと ゆきひろ 氏 のメッセージ

コンピュータの発達とそれに伴うインターネットの普及によって、多くの産業が物理的制約から解放されつつあります。物理的制約とは、具体的には場所や時間のことです。IT をはじめとする産業では、どこでもいつでも離れていても仕事をすることが可能になってきています。

このような新たな可能性を目の前にして、私たちはテクノロジーに振り回されるのではなく、新たな道具として自分の生活を豊かにすることに振り向けたいものです。

松江市は、2006 年から IT を中心にした地域振興を目指しておられます。人口や過疎問題などさまざまな地域課題を抱え、かつ、東京から遠く離れている、あるいは技術者の層が薄いなどの産業面でのハンディキャップも抱えつつ、オープンソースを活用した地域振興は全国から注目されています。オープンソースソフトウェアである Ruby の作者として、松江市民として、知恵を絞って困難を克服しようとする松江市のチャレンジ精神を応援します。

4

伝統文化が生活文化産業として発展する

メッセージ

- 大量生産大量消費の時代を経て、伝統技術の価値や日本の伝統的な生活様式を見直す動きがあります。フランス・イタリアなどは、ワイン・チーズ・パスタ・ガラス工芸など生活に根ざしたブランドを「生活文化産業」として確立させ、海外の輸出市場を拡大させています。

- お茶・和菓子・陶芸・石灯ろう・八雲塗り・来待石加工・出雲和紙など松江のライフスタイルから生み出された伝統文化と工芸が「生活文化産業」として大きく飛躍する可能性があります。

- しかし、従来の伝統的技術がそのままで価値あるものとして受け入れられるわけではありません。「伝統的な技術、作法」が持つオリジナリティを消費者ニーズやこれからのライフスタイルなど、次代を見据えて表現していくことが求められます。

- 松江に脈々と引き継がれてきた伝統工芸の価値を引き出す「ストーリー」と仕組みづくりを進めていくことで、松江の伝統産業は最新の産業として生まれ変わります。

１．松江「和菓子」･「日本酒」を世界の舞台へ

松江の和菓子は不昧公の頃に 100 品を超える菓子がつくられ、「菜種の里」「山川」「若草」などが生まれました。明治維新後、城下町の衰退に伴い、銘菓が姿を消しますが、明治中期ごろから市民の力で復活を遂げ、先人の挑戦で三大菓子処となった歴史を持ちます。この資産を大事に守りつつ、さらに新たな挑戦を重ねていきます。

優美な姿ながら、気取りのない松江和菓子の味わいを、世界の観光客の人たちに伝えるために、静かに味わうことができるスポット、和菓子職人の伝統の「技」と「まごころ」に触れられる場などをつくっていきます。

また、和菓子の味と美を、日本の食や文化に強い関心を示すアジア主要都市へ伝えていくことで、「日本文化や松江のライフスタイルを表す代表的スイーツ」としてアジア諸国へ売り出していきます。

伝統の食文化の 1 つである「酒」。さかのぼれば神話に行きつき、松江は酒造り発祥の地とも言えます。李白、豊の秋、國暉等の銘酒がありますが、観光客を迎え入れるおもてなしのお酒としてさらにアピールするとともに本物の日本酒としてブランド化を図り、アジアやヨーロッパなど海外市場での展開を進めていきます。

２．不昧公
茶の湯スタジオ

「この町では、お茶は、けいこ事でもなければ、見せかけの教養でもない。よその町で、番茶を飲むように、さらさらと薄茶をたてて、飲む。」と暮らしの手帖編集長花森安治は評しました。これは松江のライフスタイルのひとつです。

一方で、不昧公がつくりあげた独自の「茶の湯世界」は、茶碗などの陶芸、茶道具、和菓子、書、生け花、さらには茶懐石などの「食文化」にまでつながる裾野の広い総合文化であり、さまざまな伝統産業の発展にも波及していきました。

お茶文化およびお茶関連技術を、松江らしい伝統産業として活用することで、文化伝承さらには新たな文化創造と経済活性化の実現を目指していきます。

シンボリックな取り組みとして、松江のお茶文化を総合的に見せる「不昧公茶の湯スタジオ」を市内の茶室と連携して開設します。そこでは、本格的な茶の湯文化の体験だけでなく、関連する陶芸や和菓子などの製造工程や生け花の世界の見学や体験もできます。さらに若い作家や職人の育成を図るために、関連の道具づくりを担う職人たちの作品を発表する場として活用します。その作品は地元をはじめ海外市場にお茶文化と組み合わせて輸出していきます。

また、松江市民の「ライフスタイル＝気軽なお茶の世界」を伝えるものとして、例えば若い人がテーブルの上で気軽にお茶会ができる、これからを見据えた新しい茶の湯スタイルを提案します。

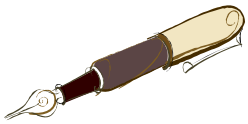
３．現代版「松江美術工芸研究所」

1946 年、田部長右衛門氏が松江美術工芸研究所を設立されました。短い期間でしたが、戦後の荒廃した日本あるいは郷土の復興のために、河井寛次郎・平塚運一・桑原羊次郎・内藤伸・増田渉など当時の一流の芸術家や文化人が地元の学生や若い人たちを指導し、その後の郷土文化の発展に大きく貢献しました。

その後訪れたバーナード・リーチ、柳宗悦などが松江に残る「手の技」を高く評価したことに示されている通り、松江には脈々と引き継がれてきた伝統工芸があります。

これに再び新たな息吹を与えます。八雲塗とプラチナ万年筆とのコラボレーション、来待石によるアート制作、勾玉のアクセサリーなどユニークな挑戦が始まっています。こうした萌芽を大きな動きにつなげていく仕掛けをつくっていきます。

市内中心部の空き家・空き店舗等を改装し、伝統工芸の若手の職人が集い、そこに地元の名工や世界の職人、デザイナー等が集結する現代版松江美術工芸研究所「松江手の技工房」を設置します。10～20 年後には、そこから次世代の名工や新たな伝統工芸品が世界に飛び出していくことを目指します。



5

農林水産資源のさまざまな価値を活用したビジネスの促進

メッセージ

- 市民懇話会・地域座談会でも多くの市民から、宍道湖・中海・日本海の漁業や郊外の農林業の将来にわたる重要性と可能性を指摘する声がありました。農林水産業をとりまく情勢は、担い手の減少、海外との競争激化など逆境にありますが、農林水産業は食料生産という大切な役割を果たしている極めて重要な産業です。

- これまでの「作る」一次産業からの転換を図り、他業種や生活者と共に新たな価値を創り上げていく仕組みを構築していきます。豊富な農林漁業資源や松江の食文化を活かして、商品の付加価値を向上させ、雇用と所得を生み出す６次産業化を推進することにより、市民や観光客に支持される新たな成長産業にしていきます。
  宍道湖・中海の「汽水湖」という特徴と水環境の改善という大目標に向かって取り組むとともに、豊かな日本海を活かした漁業づくりに挑戦します。

１．本物の食ブランドで「もうかる農業」をつくる

海外市場でも高い評価を得ている牡丹、雲州人参をはじめ、津田かぶ、黒田せり、西条柿などこれまで育んできた松江の伝統ブランドをＰＲし、「もうかる農業」をつくりあげていきます。

例えば、観光客にとって「食」は重要な要素であり、その土地らしい食の提供が満足度を高めていきます。まずは宿泊施設・飲食店等と地元の農業者・漁業者とが連携し、地域で採れたものを宿泊施設や飲食店がその材料として可能な限り購入する仕組みをつくる「域内循環」を図り、地域ぐるみでブランド化と農林水産業への経済効果を高め、観光客の満足度を高めます。

２．宍道湖・中海・日本海の水資源のさまざまな活用

宍道湖・中海の「汽水湖」という特徴を活かし、汽水域の水質や生態系を制御・管理する技術を開発し、特にアジア諸国で深刻な水問題の解決に貢献していきます。島根大学の協力を得ながら、世界的な研究拠点を目指します。

持続可能な森林を実現し、同時に宍道湖の水質を適正化していくため、間伐材等を活用したバイオマス発電等の事業モデルを構築していきます。自然エネルギーの地産地消を進め、自然環境の維持と産業活性化の一体的推進を図っていきます。

さらに、松江の「海」は巨大な未利用資源とも言えます。沖合で高級魚の養殖場を設置運営する研究を加速させ、次代の漁業づくりを追求します。

隠岐周辺では、メタンハイドレートが存在する可能性も指摘されており、国の研究による次世代エネルギーの開発を、松江の産業振興につなげることも視野に入れていきます。

３．松江「産直フレッシュマーケット」の開設

とれたての産品を味わえ、購入できる一大産直市場を水辺に開設します。

高齢化する農業者・漁業者の負担を軽減する集荷システムや、京阪神や首都圏等を対象に松江フレッシュマーケット会員制度をつくり、とれたての産品を直送するシステムなど、松江独自の仕組みを構築します。会員が松江の農業生産者へ投資したり、会員と農業生産者がお互いを訪問し合ったりするなどの交流を図ります。また、農業者の人手不足を補うため、障がい者の方々が働き手として就労するシステムや、まちなかの高齢者への給食サービスなど、農業と福祉の連携「農福連携」を実現していきます。

かつて中心部に近郷近在や北前船で全国から物産が集積したように、また鹿島町の「かんかん部隊」が新鮮な食品を提供したように、市民の台所、観光客との交流拠点として中心部の賑わいも演出します。

6

「産官学民」の「チーム松江」が
新たな産業・仕事をつくる

メッセージ

- 情報通信技術がますます発達していく将来、地域産業の競争力の鍵は立地ではなく人材になっていきます。地域で働く人たちが能力をどれだけ発揮できるか、その知恵や力をどれだけ結びつけ、新しい価値を生み出し続けられるかどうかが地域振興の成否を左右します。国内外の優秀な人材を松江に引き付け、創業・起業に挑戦しようとする人材の支援を充実・強化していきます。

- 創業・起業には再挑戦が時として大きな意味を持ちます。公民館を中心とした松江の地域コミュニティは、その挑戦を支える温かさを持っています。今こそ、松江の産業界や高等教育機関、行政、ビジネスを支援する専門人材たちが密接に連携し合い、新たな挑戦者を次々と輩出できる地域を目指していきます。

１．日本で最も「創業・起業に挑戦しやすい地域」になる

創業・起業を特殊なことではなく、多様な人が挑戦できるものにしていきます。創業・起業には個人の意思やアイデアも必要ですが、それ以上に、失敗するかもしれない挑戦を支えてくれる地域コミュニティの知恵や柔軟性、そして温かさが重要です。若者・高齢者・女性・域外からのＵターン者・Ｉターン者等々、多彩な人による「静かな起業／社会的な起業／地域社会と密接に関わる起業」を増加させていきます。

そのための起業家を生み出す「孵化器」として起業支援スペースを設置運営します。旧松江市中心部の空きオフィス、空き家等を最先端のオフィスに改造し、起業を目指す老若男女が集い、お互いに切磋琢磨し、松江に想いのある市内外の専門家のサポートも得て夢を形にしていく「沸き立つ空間」をつくりあげていきます。

２．連携をリードする高等教育機関（島根大学・島根県立大学・松江高専）

松江市および中海・宍道湖・大山圏域の各産業界の連携役を島根大学・島根県立大学・松江高専が圏域の大学等と共同で推進していきます。

例えば、医療や福祉の現場で活用する介護ロボットや機器を開発するために、圏域のものづくり産業・IT 産業・医療機関・福祉施設・金融機関・島根大学医学部・松江高専等から成る「圏域の次世代医工連携コンソーシアム（共同で目的に沿った活動を行う団体）」を立ち上げます。将来的には、欧米・アジアの主要大学とのパートナーシップを組み込んだ世界的研究拠点を目指します。

また、圏域の観光業界・交通機関・歴史文化施設・IT 産業・金融機関・農林漁業関係者・島根県立大学等々から構成される「圏域の次世代型観光連携コンソーシアム」を立ち上げ、ランドオペレーターの育成や域内での経済循環の仕組みをつくります。

３．ビジネスを支える専門人材の充実、ネットワーク化

松江らしいクリエイティブな試みをそれだけで満足することなく、必ず起業や実益につなげていくことを目指します。起業や実益につなげようとすれば大きな壁に直面することは間違いありませんが、それを乗り越えていくことで本当のノウハウを手に入れることができます。

その際、必要となるのが、ビジネスを支援する専門人材です。松江のクリエイティブな創業や起業の促進を国内外でサポートしてくれる弁護士・弁理士・会計士・経営コンサルタント・金融マン・商社マン・事業家等々のネットワークを構築していきます。一人一人がプロフェッショナルとして活躍しながら、松江の取り組みに対しては、「チーム松江」の一員として支えてくれる体制づくりを目指します。

２．松江が「人」を育てる、「人」が松江で輝く

日本の戦後の経済社会は、地方から都会へ人が大量移動した時代でしたが、時代は大きく変わりつつあり、これからは人々が地方へ回帰する時代になります。

「人」をつくることのできる地域、「人」から選ばれる地域こそが長期的な発展を約束されます。

子育ては親や学校だけの問題ではありません。松江市すべての問題であり、子どもたちは地域の宝です。子育て、人づくりは地域の＜総力戦＞です。

子どもたちは、松江で育ち、学び、いつかは外の世界へ飛び出していくかもしれません。彼ら彼女らの挑戦を松江市は応援していきます。

同時に、いつの日か彼ら彼女らが、松江に帰りたいと思ってくれるような都市・地域になっていくことを目指します。

女性・若者の活躍が松江を飛躍させる鍵となります。新鮮な発想を将来のまちづくりに活かす必要があります。

松江市は高齢化社会の先頭ランナーであり、この問題は 20 年後に向けた大きな課題の一つです。

ただ、高齢者の大半は元気で活動的であり、知識と経験、パワーはまちづくりの重要な資源でもあります。文化の世界でもアクティブシニアが上客であり、地域の文化の担い手でもあります。これまでの日本では、若者たちの専売特許だった新たなライフスタイルを高齢者がつくる都市を目指します。

また、松江の想いを共有できる外部人材も積極的に活用する必要があります。

八百万の神々が集うこの地にふさわしく、多彩な人材が活躍し輝く松江を目指します。

1

次代の人材を
生み出し続ける

メッセージ

- 将来を担う子どもたちを、家庭・学校・地域・行政・高等教育機関・多様なNPO法人や経済界が「松江の総力戦」として育てます。

- 今後、デザイン力やプロデュース力が松江の観光・文化、ものづくり産業、伝統産業、都市づくりに必要となってきます。そうした人材を地元の高等教育機関で輩出します。

１．松江からグローバル人材を輩出する

国際化に伴い海外で活躍できる「グローバル人材」の必要性は、今後ますます高まってきます。生まれ育った地域の歴史、文化等について誇りを持って語れることは、グローバル人材の必須条件です。松江が目指す郷土教育は、松江を愛し、国内外のフィールドでしなやかに活躍できる人材を生み出していくことにつながります。

また、子どもたちの歴史的なものの見方を育みます。自分が生活し、学んでいる地域や国がつくられてきた経緯、さまざまな人々の努力があって現在の自分たちがいることを学べる仕組みを構築します。また中村元先生が説かれた「異質」なものへの「寛容」と「理解」、そして柔軟で温かな思考の大切さを伝えていくことで、子どもたちの自由でスケールの大きな発想力を育んでいきます。

学校教育のみならず、民間で展開されている寺子屋学習やNPO法人が主催する芸術活動を通した人づくりなどさまざまな機関が特徴的な学びの場を提供します。

グローバルな人材を輩出していくことが地元松江の発展にもつながっていく好循環を実現させます。

２．子ども・若者の「学び直し」を サポートする地域コミュニティ

中学や高校などで「つまづいた」状況を理解し、受け止め、その子なりのやり方で学び自立していく試みを徹底的にサポートする仕組みを用意していくことが必要です。

さまざまな状況に置かれた子どもたちが等しく学びの機会を得られるよう、学校での学びに挫折したとしても、子どもたちが安心して自分なりの道を選択していくことのできる社会を松江の学校および地域の責任でつくりあげていきます。

例えば社会的事業等に参画しながら一人一人の学び直しができる「松江まちなかスタジオ（仮称）」を産官学民で運営する仕組みを構築していきます。

３．次代の専門人材を輩出する
新たな島根大学・島根県立大学・松江高専

例えば島根大学では、新たに社会人学生を主な対象に大学院コースを設定し、この地の「歴史・文化」をベースにしながら、芸術・デザインと最先端の IT などを総合的に学ぶことができる拠点をつくります。そこから観光業界のランドオペレーターや国内外にこの地を情報発信するメディア関係者、ものづくり産業・伝統工芸のデザイナーなど、今後ますます必要となる人材を輩出していきます。

松江の食育や幼児教育、観光の専門人材などを輩出する島根県立大学松江キャンパス、IT 産業での活躍や起業が期待できる人材を輩出する松江高専とともに、高等教育機関が人材を生み続けます。

４．連携をリードする高等教育機関
（島根大学・島根県立大学・松江高専）（再掲）

松江市および中海・宍道湖・大山圏域の各産業界の連携役を島根大学・島根県立大学・松江高専が圏域の大学等と共同で推進していきます。

例えば、医療や福祉の現場で活用する介護ロボットや機器を開発するために、圏域のものづくり産業・IT 産業・医療機関・福祉施設・金融機関・島根大学医学部・松江高専等から成る「圏域の次世代医工連携コンソーシアム（共同で目的に沿った活動を行う団体）」を立ち上げます。将来的には、欧米・アジアの主要大学とのパートナーシップを組み込んだ世界的研究拠点を目指します。

また、圏域の観光業界や交通機関・歴史文化施設・IT 産業・金融機関・農林漁業関係者・島根県立大学等々から構成される「圏域の次世代型観光連携コンソーシアム」を立ち上げ、ランドオペレーターの育成や域内での経済循環の仕組みをつくります。

2

女性・若者など多彩な人材が
松江に新たな価値をつくる

メッセージ

- 女性や若者の新しい感性を引き出していく仕組みづくりをしていきます。

- 松江の未来は若者たちの活躍にかかっています。まちづくりから産業活動まで、若者たちが主役となり、松江を牽引していくことのできる「舞台」を産官学協力のもとでつくりあげていきます。

１．女性・若手リーダーの創出
～　女性と若者の感性で地域を変える　～

これからの時代、まちづくりやビジネスに新たな価値を付加していくためには、女性や若者の感性が不可欠です。特に松江の主力産業である観光産業やお茶・和菓子・伝統工芸など生活文化産業では、女性・若者のリーダーがもっと活躍できる機会があるはずです。

具体的には、産官学の協力により、女性・若者のアイデアを事業化する仕組みを構築します。例えば、松江市立女子高等学校の生徒の観光に関するアイデアを基に、女性・若者を中心にしたクリエイターやビジネスの専門家等がチームを組んで商品化を進めます。

女性・若者を舞台に上げ、さまざまな経験を積む機会をつくります。

２．女性・若手クリエイターによる
松江のリデザイン

景観や標識、商業空間、交通機関等を若手クリエイターの視点でリデザインすることで、松江の新たな魅力、可能性を拓いていきます。まちなかにデザイン性のあるオブジェを設置したり、宍道湖の夕日を見る空間を創造したり、商店街を現代アートで覆い尽くす期間を設けたり、市内のバスをアート作品とする等の企画を次々と展開していきます。

世界の建築家・クリエイターの卵が挑戦したくなる仕組みをつくり、オープンなコンテスト形式でアイデアを競う場を演出します。アーティスト・イン・レジデンス（一定期間アーティストが松江に住み込む形式）といった方法を採用することで、そのプロセス自体を松江の観光資源として活用していくことも期待できます。

３．若手アーティストと伝統産業とのコラボレーション

市内中心部の空き家・空き店舗等を改装し、国内外の若手アーティスト、デザイナー等が集結する「松江手の技工房（再掲）」を設置します。専門のコーディネーターが松江の職人とのコラボレーションを促す場づくりを進めます。また、アイデアをその場で形にするための機器（3D の CAD/CAM やプリンターなど）を充実させることで、実践的な活動を支援します。

４．海外からの留学生など外国の人々が活躍できる舞台づくり

島根大学をはじめ、中海・宍道湖・大山圏域の大学で学ぶ留学生は、今後ますます増加していくことが見込まれます。留学生と地域（市民や企業など）との交流を多様化および厚くすることで、この圏域の企業などへ就職し、活躍する人材を増やします。

彼らや彼女らは、海外輸出やインバウンド（海外からの観光客誘客）を促進する戦略の中でも、キーパーソンとなりえます。帰国した後も松江との縁をつなぎ、ネットワークが維持できる仕組みをつくります。

3

アクティブシニアが
躍動するまち

メッセージ

- 意欲と知恵を持つ元気な高齢者＝アクティブシニアがますます活躍できる仕組みをつくり出すことで、高齢者自身の健康増進はもとより、地域の産業や暮らしの活性化を促進します。

- 高齢化先進地域であるアドバンテージを活かして、松江から高齢者の新たなライフスタイルを発信していきます。

- 高齢者が健康で安心して充実した生活を送ることができる地域を目指します。

１．シニアベンチャーの促進
～　高齢者の知恵で仕事をつくり出す　～

ビジネス経験が豊富な高齢者が、地域の産業・まちづくりを進めます。地域が抱える課題を解決していく社会的企業をアクティブシニアが立ち上げることを産官学で支援していきます。市内中心部の空き家・空きオフィス等のシェアリング（共同、分かち合い）や、事業者やNPO等との交流機会の確保など、アクティブシニアが地域のためにやりがいをもって働くことのできる環境をつくります。

さらに、高齢化社会でのビジネスに関心を持つ国内外の企業とのコラボレーション（高齢者向け商品・サービスの企画開発に高齢者が参画）に取り組んだりするなど、常に新たな挑戦を進めます。

２．アクティブシニアの
ライフスタイルが創造する
新たな松江

お茶文化を総合的に発信する「不昧公茶の湯スタジオ」、若者に伝統技術を継承する「松江手の技工房」、子どもを地域で育てる「寺子屋学習」、松江ブランドを創出する「農林水産品の生産者」、そして「まちあるきガイド」など、仕事に趣味に、そして地域活動に積極的なアクティブシニアのライフスタイルが新たな松江を創造します。

アクティブシニアが活躍する松江に住みたいと思う人を受け入れる二地域居住（東京や海外と松江を住み分ける）の促進制度、シニアと若者のシェアハウス（共同生活）、Ｉターン／Ｕターンの高齢者と地元住民のネットワーク形成、シニアによるWEB上での情報発信等々を産官学で盛り上げていく仕組みをつくります。

３．健康寿命を伸ばす プログラム

宍道湖・中海圏域の大学や医療機関等を中心に、予防医療技術の世界的拠点化を図ります。生活習慣病の原因となる肥満の回避、バランスのとれた食事、適度な運動、精神の安定など、島根大学を中心に、医療機関はもとより行政、市民、産業界が一丸となり、健康づくりの社会実験を進めます。

市民等の健康づくり、予防的な措置がどの程度効果をもたらしたのかを確かめるためには「長期的な取り組みによるエビデンス（根拠となるデータ）の蓄積」が必要となります。個人のマイナンバー、医療機関による診断記録、介護サービスの記録等を横断的に記録できるシステムを開発し、倫理的ルールを確立した上で疫学的な研究を推進します。この社会実験により、市民の健康増進を図るとともに、20年後には松江市が国内外の予防医療先進地域としての名声を獲得していることを目指します。

３．松江の魅力を高める「都市デザイン」

他都市に比べ、中心部の落ち込みが松江市の弱点になっているという指摘があります。

また、松江駅に降り立ったときに松江の雰囲気が感じられないという感想や、松江駅から松江城周辺までの間に途切れた印象があるという指摘もあります。

松江市全体の活性化を牽引していく役割として、中心部のにぎわいの創出や景観づくりを戦略的に推進していく必要があります。

中心市街地の持つ機能そのものを大きく見直した日常的な賑わいづくりが必要です。

さらに、大橋川改修を契機に、水辺に沿ったまちの景観づくりと、松江駅からのまちあるきルートを見直せるのではないでしょうか。

40 年というスパンでまちなみ整備や景観整備等を戦略的に進めてきた金沢のまちづくりや、民間主導でまちの修景や商業施設の再生に取り組んだ長浜、さらにフランスの都市を参考として官民一体で取り組んでいきます。

朝の景観、昼の賑わいとまちなみの落ち着き、日本一の夕景、そしてそぞろ歩きが楽しめる夜景と、それぞれ違う表情を持つ中心部をつくりあげます。

さらに再生された中心部と市内が「行きやすく」、中心部もきめ細かく「動きやすく」、「歩きやすく」、環境にやさしい交通基盤をつくることが、松江市全体の一体化につながります。

市民、事業者、ＮＰＯ、学生、行政等々と外部のクリエイターや研究者等が参画する「都市デザイン大ワークショップ」などを開催し、長期的な戦略のもと目標を共有し、具体的に進めていくことが重要です。

1

景観・まちなみの
トータルマネジメント

メッセージ

- 国際文化観光都市・松江市にふさわしいまちなみを 20 年間でもう一度つくりあげます。

- 松江駅から塩見縄手までゾーンごとに統一感のあるまちなみを創出します。まちなみを楽しむ旅行者のファンを増やし、何度でも訪れていただくことを目指します。

- 松江駅から松江大橋までの新たなまちあるきルートを創出します。また、松江の強みである水辺空間の多目的活用、歴史的景観の維持および洗練化等を戦略的に推進します。

１．松江駅から塩見縄手、松江城までのトータルデザイン

国際文化観光都市にふさわしい「国内外からの観光客を暖かく迎え入れる景観」を、松江駅を起点として整備していきます。アイデア創出と合意形成を進めるために、行政、市民、事業者等が一丸となり、女性・若手クリエイターによる松江のリデザインなど、「外からの目線」も加えて議論を深め､先進性と江戸時代の風情が一定の緊張感の中で静かに調和したまちなみを 20 年間でつくりあげることを目標とします。

２．松江らしい駅前と水辺空間をつくる

松江の玄関口駅前に降り立った瞬間、松江を訪れたことが実感できる空間・景観づくりを行います。駅自体の雰囲気づくりとともに、駅前からゆったりと流れる大橋川を前方に見通せる「水の都・松江」らしい空間を創出します。地上の広々とした空間には松江の樹木やデザイン性のあるオブジェを配置し、市民や旅行者が松江の緑も感じ、集うことができる潤いと賑わいある広場をつくっていきます。

また、大橋川改修を契機に修景された大橋川と水辺空間を活かします。大橋川や宍道湖を楽しむことのできるレジャースポット、カフェ・茶室やレストランなどの憩いの場をつくります。

さらには、松江駅前などを起点にした水上交通で水の都にふさわしい移動体験を市民や旅行者に味わってもらいます。

また、中州の貴重な田園風景も活かした、水上回遊コースをつくり出します。

３．松江駅から松江大橋までの２本の大きなまちあるきルート

松江駅前から統一感ある現代的なまちなみを見ながら、日常的な賑わいを取り戻した活気ある市街地を通り松江大橋や宍道湖に至るルート。

修景された大橋川沿いの水辺空間の景色やまちなみを楽しみながら、新たに出店された、少ししゃれたカフェ・レストランでの飲食やまちあるきができる新たなルート。

松江駅から松江大橋までの２本の大きなまちあるきルートを創出します。

２つのルートにつながる通りは、テナントミックス（最適な店舗の組み合わせ）やファサード（主に正面の装飾）によって新たな魅力を発信する商店街など、商業施設のまちあるきや買い物が楽しめます。

そして結節点となる松江大橋に再びたくさんの人が行き交います。

それぞれ対岸の景色も楽しめるまちあるきとなります。

さらに夜のそぞろ歩きは、自然な光を灯す両岸の飲食店や住居が大橋川に反射する「新たなライトアップ」となって、世界の人々を魅了する夜景を演出します。

2

中心市街地の
再活性化と連携

メッセージ

- 松江市、さらには宍道湖・中海生活圏の中心部に位置する旧松江市中心市街地は、松江藩の時代から物流の中心であり、地元の生活者がさまざまな活動に行き交う場であり、外からの旅行者が松江の雰囲気を体感する場でもあります。その意味で松江を象徴する「顔」です。

- 中心市街地の再活性化を多面的かつ戦略的に推進していきます。中心部に居住空間、オフィスゾーン、インキュベーション（起業支援）施設、商業等々の再配置と修景を大胆に進め、中心部を再び活力あるゾーンとして甦らせます。

- 中心部の再生と連動して、アクセシビリティ（行きやすさ）を追求した中心部と市内の隅々をつなぐ交通、中心部をきめ細かく動ける交通手段、歩きやすいまちをつくります。

１．中心市街地の「日常的賑わい」を再生する

まちなかの空きオフィスや空き家、空きスペースや既存施設を再利用し、

・IT 企業の集積
・起業家支援スペース
・松江伝統の手の技工房
・産直フレッシュマーケット
・若者、高齢者の居住ゾーン
・不昧公お茶スタジオ

などの新しい機能を集め、日常的な賑わいを生み出します。

その中で商業ゾーンも新たな魅力を発信し活気を生み出します。

まちあるきや消費活動を楽しむ多くの市民や観光客が流れていくような中心部に再生していくことを目指します。

２．産官学連携のまちづくり会社の設置・運営

松江の歴史文化的空間、商業空間、生活空間等を守り、さらに価値を高めていくためには、「個々の建物を有機的に結びつけて‘面としての戦略的マネジメント’」を推進していく主体が不可欠です。エリア開発の企画立案、関係者の合意形成、国内外への PR 活動、ボランティアの募集・活用などの中心的役割を担う「まちづくり会社」を産官学連携で設置運営していきます。

中心市街地の商店街の再生、水辺空間の商業・賑わいづくり、市内外の観光ルートの開発、外国人旅行者向けのランドオペレーター機能の引き受け等々を進めます。

３．歩きたく、
つながるまち

これまでの松江市のまちづくりが「モビリティ（移動しやすさ）」を求め、自動車の利便性を最大に活かす方向に進めてきた傾向にあるとすれば､20 年後に向けその大転換を実現していく方向に大きく舵を切ります。

歴史的な佇まいを色濃く残す松江城周辺など市内の地域を特定し、ゆっくりと時間が流れ、おもわず歩きたくなるような暖かな空間をつくりあげる運動を始め、自動車の通行を一定制限していきます。

今後は徒歩､自転車､公共交通をつないでいく｢アクセシビリティ(行きやすさ)｣を目指します。

一畑電車、市営バス、JR、水上交通、自転車等が連携し、中心部から郊外までつながりのあるまちづくりを目指します。

魅力の高まった中心部には、きめ細かくまちあるきを楽しんだり、手軽にオフィス間を移動できるような手段としてレンタサイクルで移動できるシステムづくりを進めます。

また、人にも環境にも優しい電気自動車バスなどの導入を進めながら、利用の利便性向上とともに商業施設でも活用できる松江型交通 IC カードや、LRT（LightRailTransit:次世代型路面電車システム)、BRT（BusRapidTransit:都市大量旅客高速輸送）をはじめとした新交通システムの研究を進めます。

3

世界とのつながりの中で
輝く松江づくり

メッセージ

- 境港・出雲空港・米子空港から北東アジアを通じて世界とつながり、経済交流と人的交流の拠点都市を目指します。

- 松江の魅力と文化力を活かした国際会議や国際大会を積極的に誘致・開催し、松江を起点に多彩なネットワークを構築します。松江を世界に開いていくことで、世界の中で輝く松江を皆でつくり出していきます。

１．世界とのダイレクトな ネットワークづくり

海外との経済交易を充実・強化していきます。例えば境港や両空港を通じて、北東アジアや東南アジア・インド、さらには欧州までを視野に入れたニーズに合ったきめ細やかな輸出市場をつくっていく戦略プログラムを推進します。

日本酒・和菓子・お茶などの食文化や松江ブランドの農林水産品、新しい魅力を創造する伝統工芸、松江発のものづくりの新製品、Ruby などを国内のみならず世界市場で展開します。

インバウンドはもとより、世界の人々との経済交流拠点を目指します。

２．「松江の文化力」で 世界に広がる人のネットワーク

小泉八雲を通じたアイルランド・ギリシャ・ニューオーリンズなどとの芸術文化交流をさらに深めます。

中村元記念館を通じたインドとの交流は、IT 大国インドとの Ruby を通じた経済交流や世界一の映画産業国とのフィルムコミッション、さらに環境面での技術協力など可能性を追求します。

また、文化と芸術でまちを再生したフランスのナント市などと「文化都市連合」を進め、これからのインバウンド（海外からの観光客誘客）にもつなげます。かつて日本文化デザイン会議が松江で開催され、注目されました。将来は松江で「世界文化都市会議」を開催し、芸術家やデザイナーなど多彩な文化人とのネットワーク化を図ります。

さらに、例えばスサノオマジックを中心に、中国・韓国・ロシアとの環日本海大会などのスポーツ国際大会や、国際的な演劇祭の開催などを通し、「松江の文化力」を世界に発信し、多様なネットワークをつくります。

八雲が見た松江―「まちづくり構想」に寄せて―

小泉　凡

小泉八雲は松江に明治日本の面影を見出しただけでなく、「人口稠密かつ富裕な松江市」（「島根九州だより」）という側面も感じていました。松江大橋の完成は住民にとって「喜ばしい事件」だといい、宍道湖を走る新造船や美保関港に大阪から入港した2艘の新しい船のことも書き留めています。当時、松江にはすでに2件の搾乳業者があり、日本海側の都市では稀にみる牛乳配達が行われていました。その恩恵にあずかったのは他でもない八雲自身でした。でも、1896年の再訪時に月照寺の近くに製糸工場ができ、煙突から煙が立ち上る光景を見た時にはこの上なく落胆しています。バランス感覚を欠いた開発には、「オープン・マインド」をもってしても、妥協できなかったようです。

八雲は、松江を含む日本全体が新しい変化を受け入れる文化的特性があることを感じていました。「地震と国民性」（「神戸クロニクル」紙の社説）では、日本が「西洋が提供できたすべてのものを受け入れ、消化し、利用できたのは、その社会の非常に変わりやすい性質によってである」と書き、その「変わりやすい性質」は、自然災害が頻発する風土によって育まれたと考えました。「移ろい」という日本文化の特性も風土がつくったと考えたのです。その上で、「明治時代の多年にわたる変化があったにもかかわらず、昔のままの牧歌的状態が残っている」（「出雲への旅日記」）ことが、松江のよき特色であることを理解していました。

「小泉 八雲」
写真：小泉家

「また八雲が歩きはじめるまち」を、まちづくり構想の一つのコンセプトにしてくださることは、子孫として光栄であるだけではなく、客観的にみても大切なことだと思います。まちに新・旧の調和、調和というより、時にセンスのよい「緊張関係」があっても面白いと思います。今後も、古いものを守りながら、最新のものをよく吟味して受け入れるまちであって欲しいと願います。

構想策定の経緯

「ビジョン懇話会」

松江市内外の委員の方々と松江市長による懇話会。松江にご縁のある方や、市民の皆さんの思いを伺いながら、松江が目指すべき姿を考えました。

◆第１回
- 平成 23 年 11 月 1 日（火）
- ホテル一畑（松江市）千鳥の間
- 構想策定の概要について

◆第２回
- 平成 23 年 11 月 16 日（水）
- 都道府県会館（東京都）407 会議室
- 構想のキーワード、論点について

◆第３回
- 平成 23 年 12 月 19 日（月）
- 都市センターホテル（東京都）703 会議室
- 構想の骨格について議論

◆第４回
- 平成 24 年 1 月 30 日（月）
- ホテル一畑（松江市）菊の間
- 構想骨格案について議論

◆第５回
- 平成 24 年 12 月 17 日（月）
- 全国町村会館（東京都）第 1 会議室
- 構想案について議論

◆第６回
- 平成 25 年 2 月 3 日（日）
- 松江東急イン（松江市）アイビー
- 構想最終案について議論

「市議会」

◆平成 23 年 12 月 20 日（火）
・まちづくり対策特別委員会　構想の骨格について説明
◆平成 24 年 2 月 15 日（水）
・まちづくり対策特別委員会　構想の骨格案について説明

「シンポジウム」

市民の皆さんと議論をはじめる際や最終案が出来た際には、市民の皆さんへお披露目をする場としてシンポジウムを開催しました。

◆第１回
・平成 24 年 5 月 27 日（日）
・くにびきメッセ（松江市）国際会議場
・市民との議論をはじめるための構想骨格案を提示

◆第２回
・平成 25 年 2 月 3 日（日）
・くにびきメッセ（松江市）国際会議場
・構想最終案を提示

「ご縁タビュー」

松江にご縁のある方々へインタビューを行い、ビジョン懇話会で構想の骨格を考える際、参考とさせていただきました。

○原田 保夫様（内閣府政策統括官）
○泉 紳一郎様（内閣府政策統括官）
○佐野 史郎様（俳優）
○小林 千寿様（日本棋院常務理事）
○芦田 昭充様（(株)商船三井 代表取締役会長）
○まつもと ゆきひろ様（一般財団法人 Ruby アソシエーション 理事長）
○赤池 大介様（(株)山陰スポーツネットワーク スサノオマジック 代表取締役）

「若い世代のみなさんと意見交換」

松江の強みや弱点について意見交換を行い、構想の骨格を考える際、参考とさせていただきました。

○商工会議所青年部、青年会議所、青年会議
・平成 23 年 12 月 9 日（金）
・松江商工会議所

「市民懇話会」

松江市内のいろいろな団体の方々とワークショップ形式により意見交換を行いました。

◆教育／福祉コミュニティ　平成 24 年 7 月 31 日（火）
◆アクティブシニアコミュニティ　平成 24 年 8 月 1 日（水）
◆ＮＰＯコミュニティ　平成 24 年 8 月 2 日（木）
◆女性コミュニティ　平成 24 年 8 月 3 日（金）
◆事業者コミュニティ　平成 24 年 8 月 6 日（月）
◆観光文化／生産者コミュニティ　平成 24 年 8 月 7 日（火）
◆若者コミュニティ　平成 24 年 8 月 8 日（水）
◆若者コミュニティ（追加懇話会）　平成 24 年 9 月 5 日（水）

「地域座談会」

松江市内 29 公民館区を５つの地域に区分し、松江市民の方々とワークショップ形式により意見交換を行いました。

◆松東ブロック　平成 24 年 8 月 20 日（月）
◆松北ブロック　平成 24 年 8 月 24 日（金）
◆松南ブロック　平成 24 年 8 月 29 日（水）
◆中央ブロック　平成 24 年 9 月 3 日（月）
◆湖南ブロック　平成 24 年 9 月 4 日（火）
◆松江市若手職員　平成 24 年 9 月 6 日（木）

「市長への提案会」

市民懇話会、地域座談会参加者の方の中から、ビジョン懇話会の委員や松江市長への提案を行いました。

◆「市民懇話会」参加者による提案会

・平成 24 年 9 月 27 日（木）

・くにびきメッセ 小ホール

◆「地域座談会」参加者による提案会

・平成 24 年 9 月 28 日（金）

・松江ニューアーバンホテル 湖都の間

「平成の開府元年まちづくり構想」策定

◆平成 25 年 3 月　「平成の開府元年まちづくり構想」策定

構想に寄せて

「ビジョン懇話会」委員からのメッセージ

伝統と革新の撹拌と昇華

日本学術会議 会長
東京大学 教授　大西（おおにし） 隆（たかし） 氏

松江に何度か伺って、議論を重ねて強く感じたのは、日本のもっとも優れた伝統や文化が残っていながらも、進取の気性に富んだ方々を多く輩出してきたことである。考えてみれば伝統もその源をたどれば新しい試みに満ちたものであったろう。その意味では伝統や文化は多様な新しい試みが行われ、それらが様々な試練を経て、あるいは淘汰されて、人々の暮らしや活動に普遍的に受け入れられる形に結実したものともいえよう。東京をベースに活動してきた私としては、特に島根大学や、Ruby をはじめとする新鋭企業の先駆的な研究や活動の発展に大いに期待したい。

また、この構想を作っている最中に、中村元記念館が八束町にオープンしたことも印象深かった。インド哲学の泰山北斗、中村博士が松江出身とは知らなかったので、この地の持つ高い文化性を改めて思い知ることになった。

この構想は、従来よりも一回り大きくなった松江市が、さらに近隣の市町村と強く連携して、山陰の経済文化圏を豊かなものにしていく、いわば開かれた松江都市圏を志して描かれた。日本や海外の若者が、訪れて何かを学べる地としてさらに発展するように、伝統と文化を守り、さらにそれらを新しい試みと融合させて、新しい伝統や文化を生み出す発展過程を常に維持するような懐の深い松江であって欲しい。

松江の人々が大切に育んできた文化力に期待して

政策研究大学院大学 教授　垣内（かきうち） 恵美子（えみこ） 氏

また八雲が歩きはじめるまち―松江は、その長い歴史が育んだ文化的な資源、そして美しい自然景観に恵まれた水の都です。宍道湖七珍や地酒といった豊かな食文化、国の重要文化財である松江城とそれを囲む武家屋敷、堀川、少し足を延ばせば、世界無形遺産に登録された佐陀神能で有名な佐太神社、八重垣神社、国宝神魂神社などパワースポットが点在する稀にみる文化の宝庫といえましょう。このまちが持つ素晴らしい文化力を、さらに高めながら、心豊かな生活を守っていくことこそ、松江が輝く道であろうと思います。

20 年後、松江がこのビジョンが示すようなまちになっていることを期待し、八雲のようにまた松江を歩いてみたいと思います。

世界に一つだけの庭園都市・松江

(株)日本総合研究所 主席研究員　藻谷（もたに） 浩介（こうすけ） 氏

松江市には、全国に類を見ない宝物が多数あります。大根島の溶岩洞窟や牡丹畑、美保北浦のコバルトブルーの海、神話時代から続く古社の数々、肌に柔らかい銘泉。それぞれの地域が魅力的ですが、そんな中でも特に私が感動するのは、松江の旧市街地がまるで日本庭園のように出来上がっていることです。

宍道湖は池、嫁が島は築島、城山は湖畔の築山、松江城は茶亭、大橋川は庭園内の大水路、掘割は小水路、松江大橋は太鼓橋、そして借景に大山と三瓶。こういう構造のまちは、世界でも二つとありません。

このような造景の妙とそれを守り育ててきたまち文化こそ松江市の誇りであり、この構想を実現する中でさらに強化して行ってほしいものです。松江の今後に期待します。ありがとうございました。

島根大学の若者が八雲と共に歩きはじめる

島根大学 学長　小林（こばやし） 祥泰（しょうたい） 氏

ビジョン懇話会では大西座長、垣内委員、藻谷委員という超一流の外部委員の、目からウロコのアイデアを沢山知ることが出来、大変勉強になりました。島根大学は松江に5000人の学生がいます。かつて小泉八雲も教鞭を執った知の拠点(COC)として地域に密着した文化的なまちづくりに貢献したいと思っています。八雲は明治時代に失われつつある日本の良さがこの地にあると感じ「知られぬ日本の面影」で世界に紹介しました。その意味で「また八雲が歩きはじめるまち」というテーマはまさに松江の温故知新です。ふるさとを見直してその素晴らしさを知り自信を持つことはまちづくりの原点と思います。島根大学も全学一丸となって参画したいと思います。

未来を考えることは足元を見つめなおすこと

ミュージシャン　浜田（はまだ） 真理子（まりこ） 氏

思いがけなくビジョン懇話会メンバーという大役を拝命して初めはずいぶん戸惑いました。けれどちょうどその頃町づくりのＮＰＯ（松江サードプレイス研究会）に参加して松江について自分なりに考え始めていたところでもありましたので、みなさんのご意見が聞けたことは大変有意義でした。

会議を重ねるうちに外から見た松江の長所や短所を知り、また発言の中から自分の中に隠れていた松江への想いを発見することもできました。

松江の宝はいろいろありますが、一番は「人」であると思います。世界に松江を紹介した小泉八雲もそう考えたのではないでしょうか。もう一度八雲が歩いた道を見つめなおして未来の松江に向かって歩いて行けたらと思います。

ビジョン懇話会委員を終えて

松江商工会議所 会頭　古瀬（ふるせ） 誠（まこと） 氏

「平成の開府元年まちづくり構想」ビジョン懇話会へ参加し、将来の街づくりについて議論ができましたことは大変光栄でした。20年後の松江を過去の連続から作り上げるのではなく、明確な将来のビジョンを非連続で見つめなおす意味は、非常に大きかったと思います。

委員の立場はそれぞれ違いますが、議論に出る松江の大切なものや印象は、不思議と一致しておりました。そうしたことから、沢山の方に共感いただけるビジョンが出来上がったのではないか、と自負しております。

委員として、精一杯思い巡らし発言をして参りました。このような貴重な経験をさせていただきましたことに、心からお礼を申し上げます。有難うございました。

「平成の開府元年まちづくり構想」への寄稿

(株)山陰中央新報社 代表取締役会長　山根（やまね） 常正（つねまさ） 氏

松江市の「平成の開府元年まちづくり構想」の策定にあたり、ビジョン懇話会の一員として提言の機会をいただき、ありがとうございました。

松江には歴史や文化、水辺の景観、伝統産業など多くの誇れる財産があり、これらの「宝」を磨き、新たな価値付けや魅力づくりを図っていくことが、まちづくりを考える上で重要であると思っております。こうした視点から、現代版「松江美術工芸研究所」や、「水の都」の風情を醸し出す松江駅から大橋川周辺の水辺を生かした街並み整備などをご提案申し上げました。

宍道湖・中海圏域の「顔」として、地域をけん引する活気ある都市づくりを目指し、ぜひとも構想を実現させていただくよう期待しております。

平成の開府元年まちづくり構想

発行日　平成 25 年 3 月
発　行　松江市
編　集　松江市政策部政策企画課
島根県松江市末次町 86 番地
Tel　(0852) 55-5173